杉並ユネスコ協会会報

151号
2024年
3月31日

Suginami UNESCO Association News Letter

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、
人の心の中に平和のとりでを築かなければならない

ユネスコ憲章前文より

- 心の中に平和の守りを固めよう
- すべての人間の尊厳を重んじよう
- 教育・科学・文化の発展に努めよう
- 民族間の疑惑と不信をのぞこう
- 世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

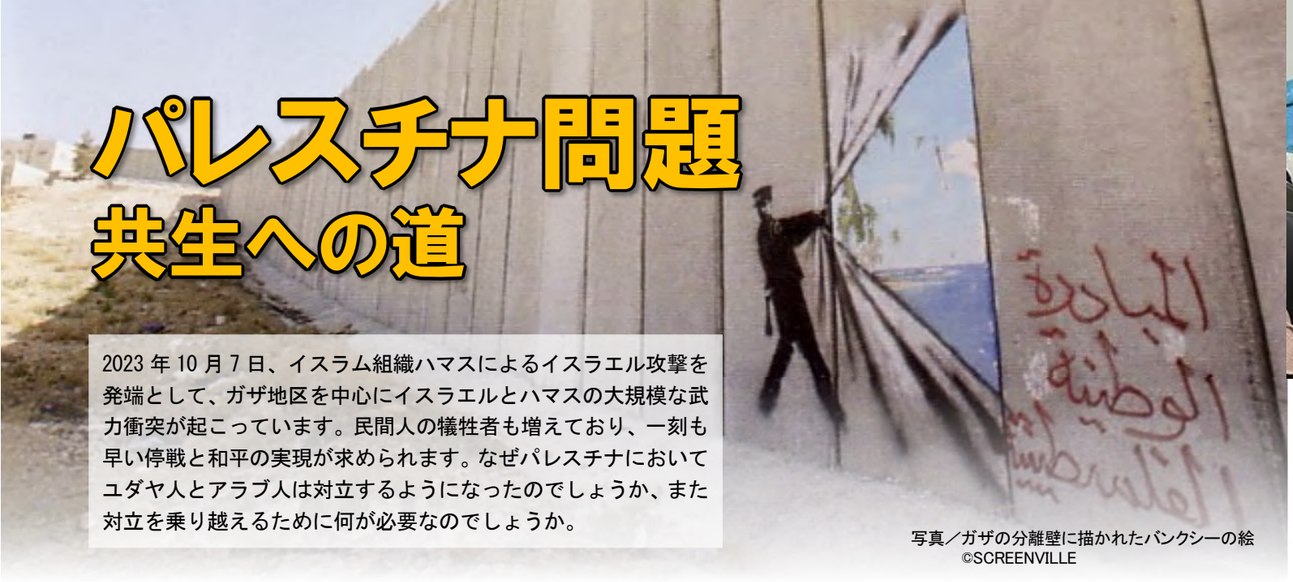
杉並ユネスコ協会

目次

特集　パレスチナ問題……2
ユネスコのつどい講演会……4
新年会／中学生クラブ……6
南相馬スタディツアー……7
平和のためのポスターコンクール／古代エジプト
講演会／都ユ連研修会／活動予定他……8

武力で作れる
平和はない。

パレスチナ問題
共生への道



2023 年 10 月 7 日、イスラム組織ハマスによるイスラエル攻撃を発端として、ガザ地区を中心にイスラエルとハマスの大規模な武力衝突が起こっています。民間人の犠牲者も増えており、一刻も早い停戦と和平の実現が求められます。なぜパレスチナにおいてユダヤ人とアラブ人は対立するようになったのでしょうか、また対立を乗り越えるために何が必要なのでしょうか。

写真／ガザの分離壁に描かれたバンクシーの絵
©SCREENVILLE

対立の原因は何か

地中海の東岸一帯に広がる、九州よりもやや小さな地域、パレスチナ。ここにユダヤ人がイスラエルを建国したのが 1948 年。この時からユダヤ人とアラブ人の紛争の歴史が始まります。そもそも、ユダヤ人は流浪の民として世界各地に散らばり、自身の国家を持っていませんでした。19 世紀末、ユダヤ人による国家建設の気運が高まり（シオニズム運動）、第 2 次大戦後に国家を樹立しました。一方、もともとパレスチナに住んでいたアラブ人は、イスラエル建国により土地を追われ、パレスチナ地域の一部や周辺国に移り住むようになりました（パレスチナ難民の発生）。その後、イスラエルとアラブ諸国との間で 4 度にわたる中東戦争（1948〜73 年）が起こり、そこでイスラエルは占領地を拡大しつつ入植を進めていきます。アラブ人の土地はパレスチナの一部（ガザ地区とヨルダン川西岸地区）に制限され、さらに 2002 年にはイスラエルにより分離壁の建設が開始されます。2007 年、ハマスがガザ地区を実効支配し、イスラエルとの武力紛争が激化していきました。今回のイスラエルとハマスの紛争は、この流れの中で起きたものです。

パレスチナ問題は最も単純化すれば「土地をめぐる争い」と言えます。すなわち、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地であるエルサレムを含むパレスチナ地域において、国家建設を悲願とするユダヤ人と、先祖代々の地を守りたいアラブ人が対立しているのです。さらに、土地を追われたアラブ人は、とくにガザ地区において貧困生活を余儀なくされています。互いに土地（聖地）への愛着があり、それは民族・宗教の根本に関わるため、対立は根深いものがあります。どうすればこの問題を解決することができるのでしょうか。

出所：読売新聞オンライン
（2024 年 2 月 23 日版）

対立を乗り越えるために

これまで何度も和平協議が試みられてきましたが、双方の反対勢力による反発や政権交代などにより失敗に終わってきました。つまり、政治的な解決は難しいということです。そこで、非常に遠回りな方法かもしれませんが、市民の間で相互理解の機会を増やし、共生の有益さを認識してもらい、そして選挙により和平を重視する政権を成立させるという方法が、一つ考えられると思います。では、どのようにして共生の有益さを認識してもらうことができるでしょうか。

興味深い取り組みとして、1970 年に設立された「平和のオアシス」（ヘブライ語で「ネベ・シャローム」、アラビア語で「ワーハト・アッサラーム」）を挙げることができます。これはユダヤ人とアラブ人が共同して生活する村（コミュニティ）で、イスラエルの最大都市テルアビブとエルサレムのほぼ中間にあります。現在、ユダヤ人とアラブ人がそれぞれ 40 家族、計 300 人ほどが暮らしています。「平等、相互尊重、パートナーシップ」を掲げ、人種差別と紛争を乗り越えようとしています。「平和のオアシス」には、保育園・幼稚園、小学校、青年・成人研修施設（「平和の学校」）、カウンセリング施設、美術ギャラリーなどが設置されています。小学校ではアラビア語とヘブライ語の両方で授業が行われ、相互の文化を理解するためのカリキュラムが組まれています。イスラエル政府の公認も受けており、他の公立学校と同等の教育水準が確保されています。「平和の学校」では学生や専門家、NGO メンバーがワークショップ、セミナーなどを通じて、紛争解決にむけた知識と技能を身につけます。そしてカウンセリング施設では、紛争によって受けた心の傷に対するケアが行われています。

関連年表	
19 世紀末	ユダヤ人のシオニズム運動
1915〜17 年	第 1 次大戦下、イギリスがアラブ人、ユダヤ人の双方に国家建設を約束（実現せず）
1947 年	国連のパレスチナ分割決議（パレスチナをユダヤ人、アラブ人の 2 国に分ける）
1948 年	イスラエル建国 領土分配に不満を持つアラブ諸国が反発 第 1 次中東戦争
1956 年	第 2 次中東戦争
1967 年	第 3 次中東戦争 イスラエルがパレスチナ全土をほぼ占領
1973 年	第 4 次中東戦争
1993 年	オスロ合意（ガザ地区とヨルダン川西岸地区をパレスチナ暫定自治区とする） 和平プロセスの開始
2000 年	和平プロセスの破綻 武力闘争の激化
2002 年	イスラエルが分離壁を建設
2007 年	ハマスがガザ地区を実効支配 イスラエルによるガザ封鎖

写真／平和のオアシス ホームページ
https://www.oasisofpeace.org/
https://wasns.org/

TBS が昨年「平和のオアシス」を取材した際に、現地の子どもたちが次のように語っていました。

ユダヤ系の男の子「僕の親友はアラブ人」
アラブ系の女の子「私の親友もユダヤ人」
TBS 記者「いつか、イスラエルの人とアラブの人が一緒になれることを信じている人は？　手をあげて…みんなそう信じているんだね」
ユダヤ系の男の子「扉を開くかヘリコプターでガザの罪のない人たちを逃がした方がいい。アラブの人と、ユダヤの人たちの間に平和はやってくるよ」
（TBS NEWS DIG、2023 年 10 月 28 日）

「平和のオアシス」は共生を実践する場として重要な意味を持っています。まだ規模が小さく、影響力は限られていますが、紛争の続くパレスチナにおいて共生の可能性を示す一例であると言えます。この取り組みがパレスチナ全土に広がるまで、地道に対話の努力を続けていく必要があるでしょう。私たちは植民地支配やアパルトヘイトなど、差別と分断の歴史を乗り越えてきました。パレスチナ問題もきっと乗り越えられるはずです。共生という希望の灯を消してはなりません。（岩野智）

イスラエル・ガザ人道危機　緊急映画上映会

2023 12/20

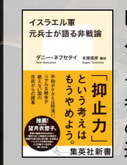
共催：東京都ユネスコ連絡協議会 2000 人プロジェクト「都ユ連交流有志の会」、ベイト・レバノン

私たちに何かできることはないだろうか？年の瀬が押し迫る中、有志が集い、緊急映画上映会を開催しました。上映作品は、ジャーナリストである古居みずえ監督の「ぼくたちは見た ～ガザ・サムニ家の子どもたち」。2008 年のイスラエル軍によるガザ攻撃後に子ども達を追ったドキュメンタリーです。親を含めた親族 29 人を一度に失いながらも、懸命に生きるサムニ家の子ども達が負った心の傷と変化を静かに映し出しています。深い悲しみや憎しみを抱えながら、「信仰と耐えること、それは武器よりも強い。」と言葉少なく語る少女の胸中は計り知れません。

上映後にオンラインで登壇された古居監督は、「今、国際社会や政治よりも市民の声の方が大きい。」として、私たちが真実を知り、気づきを周りの人へ伝えていくことの大切さを語ってくれました。その先に国が動いてくれればと希望を込めて。満員御礼の会場内からは、「関心を持ち続けたい」「全ては知ることから始まる」「行動できる一人になりたい」という声が多数聞かれました。

なお、参加費及び募金の全額 137,520 円を、日本赤十字社「イスラエル・ガザ人道危機救援金」に寄付いたしました。

おすすめの一冊



「イスラエル軍 元兵士が語る非戦論」
ダニー・ネフセタイ著 集英社新書

イスラエルでは、戦闘機パイロットになること以上の名誉はないという。著者はかつてイスラエルを守るために戦い、優越感を得て麻痺していった自身をいま振り返り、自国を守るための歪んだ教育に NO を突きつける。

［望月衣塑子氏推薦］ 復讐の連鎖は何も生まない。「国のため」と洗脳された著者が、呪縛から抜け出したどり着いた真実は、パレスチナの現状を前にどう行動すべきかを問いかける。

今回の会報表紙は、パレスチナとイスラエルを WWJD の文字で描いています。WWJD とは、What Would Jesus Do? の略で、「神ならこんな時どうするだろうか？」と迷った時に自分に問うキリスト教の祈りの言葉とされています。

（西野裕代）

ユネスコのつどい
SDGs 講演会

美しく豊かな海を未来に届けるために

2024 年 2 月 18 日（日）　セシオン杉並　講座室

道田　豊　氏　MICHIDA Yutaka

広島市生まれ。東京大学理学部地球物理学科卒。同大学にて修士号（海洋物理学）、博士号（理学）取得。海上保安庁や科学技術庁での勤務、日本南極地域観測隊への参加などを経て、現在、東京大学大気海洋研究所教授。2023 年よりユネスコ政府間海洋学委員会議長。

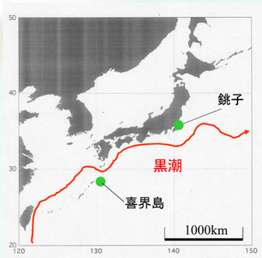
2023 年度の「ユネスコのつどい」では、SDGs（持続可能な開発目標）の観点から、海洋環境をテーマとして講演会を開催しました。講師は日本人初のユネスコ政府間海洋学委員会議長を務める道田豊氏。海洋に関する国内外でのさまざまな経験から、現在世界の海が直面している問題、とりわけ海洋プラスチックの問題についてわかりやすく説明していただきました。

講演の冒頭では、道田氏が海洋研究を始めたきっかけ、海洋に関する基礎情報（体積・深さ・水温・塩分、海の機能など）、そして自身のこれまでの調査・研究の経験について紹介がありました。海は「気候の緩和」（温暖化の熱を吸収）、「生態系の維持」（水の循環により陸上の生態系も維持）、「食料資源」、「海運、海洋エネルギー、観光」といったさまざまな機能を持ち、地球や人類にとって重要な役割を果たしています。この海の状況を、道田氏は長年研究してきました。海上での実際の調査の様子や、1986〜87 年に日本南極地域観測隊のメンバーとして南極に渡った際の様子など、写真を交えてお話しいただきました。

海の流れが運ぶもの

次に、ご専門である海洋・海流の動きについて、日本沿岸での漂着物のエピソードを紹介しながら説明していただきました。――2002 年 1 月、鹿児島県の喜界島に 1 本のガラス瓶が漂着しました。ガラス瓶の中身は日本語・英語・フランス語・スペイン語の 4 カ国語で書かれた 4 枚のハガキ。これは 1985 年に千葉県立銚子高校の生徒たちが部活動の一環で、海流調査のため銚子沖から流した瓶でした。16 年以上の歳月を経て、約 1500 キロ離れた遥か南の島に辿り着いたのです。

一体、どのような経路で辿り着いたのでしょうか。日本列島の南には沿岸に沿って黒潮という海流が流れています。これに乗ったと予想されますが、黒潮は西から東に流れているため、銚子沖から喜界島に至る経路とは方向が逆になります。そこで道田氏はいくつかの可能性を指摘します。まず、黒潮のさらに南に黒潮から枝分かれした黒潮反流という海流が流れています。これは黒潮（本流）とは逆に東から西へ流れています。これに乗った可能性が高いですが、銚子沖から喜界島まで数カ月程度で到着してしまう場合もあるようです。次に、北太平洋には亜熱帯循環と呼ばれる大規模な海洋の流れがあります。亜熱帯循環は日本の東岸→北アメリカの西岸→ハワイ→日本の南海へと時計回りに流れており、黒潮もこの循環に含まれます。これに乗った場合、1 周 4〜5 年かかり、それを何回か繰り返せば 16 年後に喜界島に到着してもおかしくはありません。道田氏も「充分ありうる」と予想します。一方、世界の海を旅して喜界島に流れ着いたという考え方もありますが、これは世界の海の流れからすると「可能性は小さい。または、まずありえない」とのことでした。



出所：道田豊氏の資料に加筆

このように、海流の位置や方向、速さ、流量などが、これまでの調査・研究の積み重ねにより明らかになっており、それを利用して漂着物の経路を推測することができるようになっています。このような知見は、海洋での自然・人為的災害や海洋汚染などの状況を分析する際にも役立てられています。

海洋プラスチックの問題

海洋汚染として近年注目されているのが、海洋を漂流するプラスチックです。世界で生産されるプラスチックの 1.5〜5%にあたる 500〜1300 万トンが海洋に放出されているとされています（数値は 2015 年）。国別の排出量では中国が最も多く（約 28%）、次いでインドネシア（約 10%）、フィリピン（約 6%）とアジア諸国が上位を占めます。日本は 30 位（約 0.5%）ですが、年間 2〜6 万トンものプラスチックを海洋に排出しています（数値はいずれも 2010 年推計）。

海洋プラスチックの問題は、すでに 1970 年代初頭に指摘されていました。国際的な関心が高まったのは、2015 年の G7 エルマウ・サミット（ドイツ）です。議長国ドイツが海洋ごみ問題を課題として取り上げ、首脳宣言にも盛り込まれました。海洋プラスチックは回収するのが難しく、波や紫外線により細かく破壊され、その断片が生物の体内に入り込みます（内臓から吸収される可能性もあります）。2050 年には海洋プラスチックが魚の総量を超え、生態系への影響がはっきり現れ始めるとも言われています。しかし、海洋プラスチックがどこに集中し、その状態がどのように変化し、生体にどのような影響を与えるのかについては、まだ不明な点が多いとのことです。

海洋プラスチック問題を解決するためには、プラスチックごみを海に放出しないこと、また過剰なプラスチックごみを減らすことにあります。道田氏はプラスチックごみの削減について、いくつかの疑問に次のように答えています。

①レジ袋の有料化は意味があるのか？
（回答）プラスチックごみ全体に対するレジ袋の割合は大きくないものの、プラスチックごみを環境中に出さないという意識づけにはなった（レジ袋の辞退率も実際に上昇している）。
②個人の努力だけでは効果が小さいのでは？
（回答）1 人が完全にプラスチックを使用しない生活を送るよりも、1000 人が少しずつ使用を減らしたほうが効果は大きい。できる範囲で取り組むことが大事。
③感染症対策にプラスチックはどうしても必要なのでは？
（回答）少なくとも現状ではプラスチックを使用することは有効。重要なのは使用後の処理。その一方で、プラスチックに代わる製品を開発することは続けてほしい。
④プラスチックのリサイクルにはエネルギーが必要で、かえって環境に悪いのでは？
（回答）二酸化炭素の排出抑制のみを目指すのであれば、リサイクル工程を見直してエネルギーの使用を抑えるべき。しかし、深刻な海洋汚染を回避する必要性が高ければ、リサイクルのために多少のエネルギーを使用する意味はある。

道田氏は、プラスチック製品は便利であり使用してもよいとする一方、海洋に放出される前に適切に処理することが重要であると述べていました。便利な生活と環境の保護――この両立はまさに「持続可能性」を追求することであると言えるでしょう。

国際的な海洋保全の取り組み

講演の最後に、海洋プラスチック問題をめぐる国際的な動きとして、国連の活動が紹介されました。国連では SDGs の目標 14「海の豊かさを守ろう」を達成するために、2021〜30 年を「国連海洋科学の 10 年」と定め、海洋研究の推進を図っています。この実施計画を中心となって策定したのがユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）で、道田氏は日本人として初めて IOC の議長を務めています。IOC は 1960 年にユネスコの専門機関として設立され、戦後復興中の日本も設立に貢献したとされています。

“One Planet, One Ocean”（地球は一つ、かけがえのない海）――これは IOC の掲げる標語です。道田氏は「海があって、生命があってこその地球」、「海がなければ、我々生命は生きていけない」と述べ、海の大切さについて認識を新たにし、できることを少しずつしていくべきだと参加者に語りかけていました。参加者も興味深く話に聞き入っている様子で、質疑応答ではプラスチックのリサイクルや代替プラスチックについて、また海洋・海流の状態から見た温暖化の傾向について質問をしていました。

講演を通して、道田氏が「無理のない範囲で取り組むこと」を繰り返し呼びかけていたのが印象的でした。高い削減目標を立てても達成できなければ意味がありません。日常生活のレベルを維持しながら、できることを少しずつ行うことが、持続的な取り組みにつながるのだと思います。まずは海洋環境について知り、そして意識を高め、ほんの少しプラスチックを減らすところから始めてみてはいかがでしょうか。（山田祐子・岩野智）

参加者の感想（アンケートより抜粋）

- とても身近な海ですが、まだまだ知らないことが多く、興味深く聞かせていただきました。プラスチックの利点と廃棄時に注意を払って生活していきたいと思います。
- 学校の授業で少ししか触れられなかったり、まだ習っていない単元だったり、自分の理解が不十分な分野について原理から知ることができて楽しかったです。（学生）
- 講師の先生のお話が大変わかりやすく、ユーモアも交えて大変面白く、また、ためになりました。自分のできることを、出来る範囲で意識をもって、環境について考えて行動していきたいと思いました。

杉並ユネスコ協会

2024年 新年会

1月27日（土） 杉並会館

2024年の新年会は、1月27日（土）に、杉並会館で開催されました。区長代理 関谷隆 杉並区生涯学習担当部長、本橋宏己 杉並区生涯学習推進課長、北川次男 杉並区社会教育センター所長にご出席戴き、城戸譲 理事の司会で会は進行いたしました。佐藤直子会長から、区からのご支援への感謝の言葉と、「これからの世代にとっての新しいユネスコを作っていく準備をしていかなければならない時期に来ていると思います。これからは今まで以上に、地域ユネスコとして横との繋がりを大切にしながら、活動を行っていければと思っています」と現在の目標を伝える挨拶がありました。続いて関谷部長より、区長代理として「ユネスコ活動への共感と応援」の御挨拶を賜りました。会の途中で林美紀子顧問から、発足当時のお話と共に「過去に一人の人が同じ役職を長年務めていたことで弊害が生じたことがあった」と「役を交代して担っていくことが、活動を開かれたものにしていくために大切だ」という示唆に富んだお話をして頂きました。ともすれば「〇〇さんのプロジェクト」となりかねないボランティア活動への警鐘だと深く心に響きました。

行政の方々とゆっくり情報が交換できた、和やかで実のある集いだったと思います。（辻 邦）

英会話と国際理解

ユネスコ中学生クラブ

12月

イヤーエンドパーティ

1月

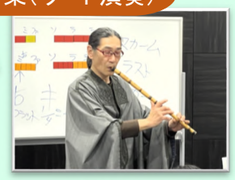
講師 弁財亭和泉さん（落語家）

日本文化（落語）

2月

講師 常味裕司さん（ウード奏者）

アラブ音楽（ウード演奏）



3月

3年生を送る会

青年部

第2回 南相馬スタディツアー

東日本大震災の教訓と被災地の復興について学ぶ

2023年12月26日(火)～28日(木) 参加者9名・引率3名

スタディツアーから学んだこと

青年部部長 湯田 晴斗

2011年3月11日、当時小学生だった私は、下校前で学校の下駄箱周辺で地震に遭い、安全のため階段の下に潜り込んだ。その後、校庭に集められ親が来るまで待機していた。幸いなことにその後すぐ家に帰ることができたが、テレビではほとんどが地震や津波のニュースで単調だったと当時感じていた。余震にも慣れていたと思う。しかし、福島では刻一刻と事態は変化していた――

今回訪れた**消防・防災センター**と**原子力災害伝承館**では、地震、津波、原子力災害の出来事が時系列順に並べられていた。だんだんと悪化する事態に恐怖を覚えた。しかし、当時の福島の人々は津波の被害や原発の危険の情報があまり伝えられることなく避難を余儀なくされたと、今回お話を伺った。きちんとした意思疎通が政府や東京電力と住民との間でとれていなかったことが、復興への対応の遅れにつながったのではないかと感じた。

震災遺構である**浪江町立請戸小学校**では、津波の前後の姿が比べられていて、被害の大きさを物語っていた。この小学校は海沿いにあったため、壁がなくなったり、柱がひしゃげたりするなど大きな被害に遭った。しかし、この小学校では想定を超える津波が来たにも関わらず死者を出さなかった。津波が起きたとき危険を感じ、従来の訓練より遠くの山に避難したことが生死を分けたのである。

おれたちの伝承館では、震災や原発事故に関する芸術作品が多く置かれていた。福島県以外に住む多くの人が特に原発に関心を持ったことがわかる。ここを建てた方の一人にお話を伺った。その方は原子力発電所で以前働いていたものの、原発のことを諸悪の根源と語っていた。実際、**東京電力廃炉資料館**を訪れた際も、東京電力側は自分たちが加害者であるという立場であった。その一方で、原発により周辺の町は発展したという側面もある。**原子力災害伝承館**では原発ができる前の様子が展示されていたが、どこにでもある貧しい漁師町という印象であった。原発ができたことで多くの雇用が生まれ、交付金も入り、大いに発展したのである。私たちの周りには都合の良い話が多くある。良い部分がいかに強調されていようとリスクをはらんでいる以上、そこに目を向けないことは危険であると思われる。

私たちは電力を原子力などに頼ってきたが、この災害を機に原発を一部止めて火力発電に比重を移そうとしている。再生可能エネルギーはいまだ安定した供給ができていない。未来の人々が火力発電による地球温暖化で苦しんでいるのか、原子力廃棄物や原発事故によって苦しんでいるのか、それはわからない。電力なしには生きられない私たちにとって、電力の問題は関係のない話ではなく、一人一人が当事者意識をもって真剣に考えるべき問題である。

被災地の復興については、津波の跡地が**ロボットフィールド**などの研究施設に利用されており、着実に進んでいる印象を受けた。私は大学でプラント（工場設備）に関する授業を受けているが、ロボットフィールドには、工場で災害が起こったときに設備の状態を確認するような大規模な実験施設がある。東日本大震災を受けて、次の災害への対策が行われているのである。その他にもドローンやロボットなどの研究も行われており、復興から未来にむけた活動を見ることができた。

私は現在、大学で理系を専攻しているが、科学は人を幸せにも不幸せにもすることができる。大学の授業でこういったことを学ぶ機会は確かにあるものの、心に残るようなものは少なかった。しかし、今回スタディツアーで実際に見聞きしたことは、科学に携わる者として心に留めておくべきことであると強く感じた。福島で起こったことを深く学ぶことができ、とても貴重な経験であった。

主な訪問先

南相馬市消防・防災センター

東日本大震災・原子力災害伝承館

浪江町立請戸小学校

おれたちの伝承館

東京電力廃炉資料館

福島ロボットテストフィールド

報告　平和のためのポスターコンクール　表彰式

主催：杉並区　共催：杉並区教育委員会・杉並ユネスコ協会

2023年12月13日（水）　杉並区役所

区内の小中学生を対象に「戦争の悲惨さと平和の尊さ」をテーマとしたポスターコンクールが行われ、応募総数676点のうち、小中学校それぞれ15点が表彰されました。受賞作品には、戦車によって破壊される街と涙する人間を描いたものや、「戦争ハ人間味ヲ奪ウ」と強烈なメッセージを入れて描いたものなど、個性あふれる作品が多く見られました。

報告　講演会　古代エジプトの文化と世界遺産

主催：異文化アカデミー

2024年2月12日（月・祝）　阿佐谷地域区民センター

村治笙子・杉ユ協理事が古代エジプト人の精神世界について、世界遺産や壁画、ヒエログリフなどを通して説明しました。同氏は古代エジプトの壁画研究家でもあり、自ら調査で訪れた遺跡を丁寧に紹介していました。古代エジプトでは自然界のさまざまなものに神が宿るとされ、八百万（やおよろず）の神を信じる日本と共通する特徴があると指摘していました。

報告　平和を願う映画会　主催：杉並女性団体連絡会

2024年2月17日（土）　勤労福祉会館

病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた、中村哲医師の軌跡を描いたドキュメンタリー映画「荒野に希望の灯をともす」の上映会が開催されました。谷津賢二監督が映画に込めたメッセージは、「一隅を照らす」。今いる場所で最善を尽くすことを意味します。中村医師は今もなお、私達に大切なメッセージを伝え続けています。

報告　都ユ連研修会 神宮外苑・聖徳記念絵画館 見学ツアー

主催：東京都ユネスコ連絡協議会

2024年2月23日（金・祝）

再開発で関心が寄せられている神宮外苑を散策しました。明治天皇崩御に伴い整備された内外苑の歴史的役割から、聖徳記念絵画館での近代史の学び、さらに再開発の状況を肌で感じることで多くの気づきが得られました。フィールドワーク後の全体会では多様な意見が活発に交わされ、有意義な研修会となりました。

募集　2024年度 ユネスコ中学生クラブ

2024年4月13日（土）開始
原則、毎月第2土曜日
14:30～16:30

月1回の英会話と国際理解講座

- 会場　セシオン杉並（杉並区梅里1-22-32）
- 対象　区内在学・在住の中学生
- 定員　40名（申込順）
- 参加費　4,000円

※要メール申込。「広報すぎなみ」3月1日号をご覧ください。
※途中入会も可能です。

申込はコチラ

お願い　能登半島地震募金

2024年6月30日（日）まで
（期間は延長する場合があります）

日本ユネスコ協会連盟では令和6年能登半島地震を対象とする「災害子ども教育支援募金」を行っています。募金は被災した学校等や子どもたちの奨学金、被災地に赴くユース・ボランティアへの支援に充てられます。ご協力よろしくお願いいたします。

詳細はコチラ

https://www.unesco.or.jp/activitiesitem/educationsupportitem/22789/

活動予定

3月 March

1日（金）	理事会
3日（日）	科学教室「ドクタートミーの爬虫類教室」
9日（土）	中学生クラブ（3年生を送る会）
27日（水）～30日（土）	青年部 広島スタディツアー

4月 April

2日（火）～3日（水）	国際中学生交歓会
5日（金）	理事会
13日（土）	中学生クラブ（開級式と英会話）

5月 May

10日（金）	理事会
11日（土）	中学生クラブ（英会話と国際理解）
19日（日）	2024年度杉並ユネスコ協会総会

6月 June

7日（金）	理事会
8日（土）	中学生クラブ（英会話とスポーツ大会）

杉並ユネスコ合唱団練習

3月28日（木）	4月11日（木）
4月25日（木）	5月 9日（木）
5月23日（木）	6月13日（木）
6月27日（木）	

杉並ユネスコ協会会報 151号　2024年3月31日発行
発行者　杉並ユネスコ協会 会長 佐藤直子
事務局　〒167-0043　東京都杉並区上荻2-34-10 山田正方
TEL 090-6105-6633　FAX 03-3399-0339　E-mail suginami@unesco.or.jp
編　集　杉並ユネスコ協会広報担当
口　座　ゆうちょ銀行／記号10040 番号18974381（ゆうちょ銀行間での振込）
店名 〇〇八（ゼロゼロハチ） 店番008 番号1897438（他行からの振込）
みずほ銀行／荻窪支店　普通口座　番号4047995
ホームページ　http://suginami-unesco.org/